

## 平成29年度 第1回 桐生市総合教育会議 議事録

1. 日 時 平成29年12月6日(水) 午後3時00分～4時17分

2. 場 所 桐生市役所 3階 特別会議室

3. 出席者

【構成員】 桐生市長 亀山 豊文  
桐生市教育委員会  
委員長 大澤 美智子  
委員長職務代理者 柴崎 隆夫  
委員 板橋 英之  
委員 新居 理恵  
教育長 高橋 清晴

【事務局】 (市長部局)  
総合政策部長 和佐田 直樹  
企画課長 田島 規宏  
企画担当係長 金子 英雄  
技師 坂主 樹哉

(教育委員会事務局)  
管理部長 戸部 裕幸  
教育部長 端井 和弘  
総務課長 原橋 貴史  
学校教育課長 島倉 雄一  
庶務係長 石橋 政幸

【傍聴者】 なし

【報道機関】 1社

4. 議 題

- (1) 桐生市教育大綱について
- (2) 今後の重点的に講ずべき施策等について

## 5. 議事の概要

(開始：午後 3 時 0 0 分)

### ○開会

〈田島企画課長〉

### ○亀山市長あいさつ

首長と教育委員で構成する総合教育会議は、平成 27 年 4 月の法改正により、すべての自治体に設置された。桐生市においても、平成 27 年 7 月に桐生市総合教育会議を設置して以来、2 年間で 4 回の会議を開催し、桐生市教育大綱の策定をはじめ、今後の教育行政について重点的に講ずべき施策や課題等について協議をさせていただいた。これまで様々な機会を通して、教育委員の皆様と懇談や意見交換をしているが、このように公の場で議論をするのはこの総合教育会議だけであり、今後ともこの総合教育会議を通して開かれた教育行政を行い、市民に公開していきたい。

3 年目となる今年度も、教育に関する私の考えを述べさせていただく貴重な場であり、また、教育委員会と連携を更に深めるためにも、この総合教育会議は大変重要になってくるので、ぜひ忌憚のない意見をいただきながら、より良い教育行政が実行できるよう力を貸してほしい。

### ○協議・調整事項

〈議長：亀山市長〉

#### (1) 桐生市教育大綱について

〈事務局説明〉

(資料「桐生市教育大綱（改定案）」について、説明。)

〈柴崎委員〉

教育大綱を総合計画に合わせて 2 年延長することには、異議は無いが、良い機会なので内容について話したい。

教育大綱を作るときに、「①ふるさと桐生を再認識する事業の推進」の部分について、ここには桐生市ならではの教育とか、桐生独特の教育とか、桐生でなければできないような教育ということで、当時我々の意見を申し上げた。その中で、桐生は各学校区に幼稚園を設置して、120 年も前から幼児教育に真剣に取り組んできたという経緯があるということをお話したが、それが取り上げられ過ぎてしまい、ふるさと桐生という①番のところに「幼児教育」だけ入ってしまった。④番の「自然・歴史・文化・人材」の部分は桐生市独自の、独特の教育と言えるものが非常に多い。この④番の中に「桐生ならではの特色ある教育の充実を図ります」と書かれているが、これらを全て「①ふるさと桐生を再認識する事業の推進」の中に入れて、6 項目ではなく 5 項目にした方が良いのではないかと。まず 1 番目

の「①ふるさと桐生を再認識する事業の推進」で桐生の教育はこういうものだ、こういう風にしたいのだということをまとめられると思うので、今度改定するときにはぜひ教育大綱の①～⑥を5項目にして、①の中に④を全て入れていただければ、よりインパクトのある教育大綱になる。2年後までにそれらを検討して進めていただきたい。

<亀山市長>

現時点の要望という形で捉えさせていただく。

この件について、教育委員会から何か意見はありますか。①の表題からすると、確かに何で急に幼児教育が出てくるのかなとは思う。

<大澤委員長>

今の事務局からの提案は、教育大綱の策定期間を2年延期するという事。ということは、現行の教育大綱をこのまま2年間引き継ぐということ。そこで、柴崎委員からこのような意見が出たのだと思う。我々は、この大綱を作るところから関わってきているので、今のような細かい話が多少できる。平成31年度の見直しまでの2年間で、今のような話をまとめていただいて、それを踏まえて見直しに入っていけると良いと思う。

<亀山市長>

そういう方向でよろしいか。

せっかく2年延長するので、この総合教育会議だけでなく、教育委員会議の中でもそんなことを取り入れながら広く、またより良いものにできるようにしてってください。

<高橋教育長>

私も賛成。

この大綱は初めて作った時のものだが、その時は細かい話し合いも色々重ね、結果として現行の形にまとまったが、やはり2年経ち3年経ち、改めて見てみると、今そういった意見が浮かび上がることも納得できる。

大綱なのでそれほど大きく変わる必要はないと思うが、ちょうど1年間の検討時間を設ければ、31年中に改定できるので、そういう目安で1年間かけて改定まで検討したいと思う。そういう形で、事務局にお願いする。

<亀山市長>

それでは、桐生市教育大綱については、事務局からの原案のとおり、現在改定手続きを進めている桐生市新生総合計画に合わせ、現在の大綱の策定期間を2年間延長するとともに、平成32年度以降の次期大綱の策定期間を5か年から4か年にするという事よろしいか。

<全委員>

(異議なし)

<亀山市長>

では桐生市教育大綱については、そのように手続きを進めていく。

## (2) 今後の重点的に講ずべき施策等について

<事務局説明>

(資料「桐生市教育大綱に関わる平成30年度主要事業」について、説明。)

<亀山市長>

今事務局より説明があったが、今後の教育行政について重点的に講ずべき施策や課題等、意見があれば教育委員の皆様から遠慮なく発言をお願いしたい。

<板橋委員>

サイエンスドクター事業が大変うまくいっていて、清流中学校が科学の甲子園ジュニア大会に今年も出場する。桐生タイムスにも載っていたが、先日群馬大学大学院理工学府のサイエンスドクターが幼稚園に行ってプログラミングを教えた。やはり早いうちからプログラミングに慣れておくということが大変重要。サイエンスドクターだけではなくて、例えば桐生高校のSSHなどと連携して、高校生が幼稚園児に教えるとかそういうことも含めて、もっと年齢層を広げた連携が取れば、桐生ならではの取組ということで、何か一つ柱ができるのではないかと思うので、ぜひ検討してほしい。

<端井教育部長>

板橋委員からの指摘の通り、若いうちから科学に触れることを考える必要があると思います。試行的にサイエンスドクターの先生に幼稚園を訪問していただいて、積み木を使ってプログラムについて教えてもらったり、ロボットを見せてもらったりということを実施した。時間的には30～40分だが、幼稚園児は非常に集中してドクターの話を聞いたり、どうやったら良いのか考えたりしていた。試行で行ったものを広げられると良いと感じたので、今後実施に移れるように努力していきたい。

また、桐生高校のSSHについても、今実施していることを小学校でも来年やる予定で、今後それを高校生との交流や、できれば幼稚園・小・中・高・大で一貫して学べるようなプログラムができると、桐生市でそういうものが一貫して学べる、また気付けるということになるので、まだ夢に近いが、そのようなことを考えていきたい。いろいろお世話になるがよろしくをお願いしたい。

<板橋委員>

プログラミングは論理的な思考力が養えるので、早いうちから触れていくというのが重要。

今商業高校でも一生懸命色々やっているということを知った。商業の生徒もこれに参加できるようにすると非常に良いと思う。

<亀山市長>

先程の幼児教育、歴史的にも素晴らしいという話がありますが、このサイエンスドクター事業を始めたことによって、やはり群馬大学理工学部との連携や、桐生高校のSSHだとか、こういう風に桐生のまちに来ると理科教育というか、一貫してこういう教育が受けられるという特色がもっと出せると思う。

幼稚園での実施も必要だし、板橋先生が言った商業高校との連携もやることによって、より良い方向に行くのではないかと私はすごく期待している。

<端井教育部長>

商業高校との連携という話もお伺いできたので、どんな方法があるのかということも含めて研究していき、桐生は学ぶ魅力のあるまちということに繋げていけるよう進めていく。

<亀山市長>

樹徳中学校などにも波及して、意識して取り組んでいるという話も聞くので、いい方向に向かっていると思う。ぜひその方向で進めてください。

<柴崎委員>

子ども同士というのは学び合いの中で、人に教える、あるいは教わるということと自分の身に定着していく。教える側に立った人がただ単に自分の知っていることを教える、技術を伝えるだけではなくて、そこは考えないとまた先に進まない。教えるのは自分を高めるには良いこと。高校生が中学生や小学生に、大学生が高校生や中学生に教えるのは、お互いにとって非常に良い教育の環境の場になると思うので、ぜひ、幼稚園から大学まで、更には私立の中学高校まで全部含めて桐生市の教育というものを考えて今後進んでいけたら、もっと桐生の子ども達が伸びると思う。

<亀山市長>

良い方向に進むと思うので、より充実させていく。

<大澤委員長>

板橋先生のこれまでのご尽力のおかげで、サイエンスドクターをはじめとして理工学部との連携がどんどん進んできていると思う。

この間、伝統的建造物群保存地区の5周年記念行事に参加したら、主催は文化財保護課だったのを見て、私はこれからの桐生に光が灯ったように感じた。というのは、重伝建に指定されたときに、私は古いままと保存するよりもこの先の未来に向けてどうしていくのかということに関心があったが、重伝建の家をお持ちの方々自身が若い人に引き継いでいきたいということを真剣に考えていた。古い建物も改修しようとしていた。息子が後を継がないとしても、誰か若い人に入ってもらいたいという気持ちがあるらしく、そういう活動を一般の方々が進めているようだ。

そのような流れの中で、ものづくりに大変適しているということで、太田の若い方が重伝建でものづくりを始めた。そこで、自分に関係する人たちや友人を呼んで、桐生の重伝建のあたりをこれから未来に向かってのものづくりの拠点にしたいという夢を語っていた。

今日の定例会のときに報告があったが、文化財保護課が北小学校を拠点に防災訓練をやったとのこと。それを聞いて、どんどん広がってきていると思った。さらに、コーディネーターの金井先生が群大理工学部の先生だということを知り、

しかも桐生生まれ桐生育ちということが分かり、これは未来にすごく繋がると思った。今後も色々なところで群大理工学部との連携が進んでいくということにも期待している。

<亀山市長>

今年文化財保護課を重伝建の担当に配置替えしてきた。あとはこれから歴史的風致維持向上計画、国土交通省が関係しているが、このあたりは桐生市全体として全庁的に取り組んでいくことだと思っている。

先生が言ったものづくりの拠点は、色々な新しい人が出てきているので、我々も大事にしていきたいと思う。

今、なんといっても跡継ぎが一番。事業承継などを活かしながら維持向上ができれば良いと思う。市外から来てくれた人も大事にしながら、ネットワークで取り組みたい。あとは家主が貸してくれるか貸してくれないかという問題もある。そういうのも研究しながらやっていきたい。

<高橋教育長>

今の伝統的建造物群保存地区に指定されるまでが大変な努力が必要だったが、それが最終目的ではない。今までは、市長が言う国土交通省と土地の方の利用について、企画は都市計画課や土木課で行っているが、基本的にはあの地域に住んでいる人たちが、生き生きとした地域にしていくということがかなりウエイトを占め、そうするとそれが全体的に桐生に広がっていくことが考えられる。それから文化財保護課の方は、文化財を本当に「守る」ということ。その2つが一緒になった施策が、おそらくこれから必要になるので、今の形はまだ途中の形だと思う。

それから段々、文科省の文化庁の方で、改修にはかなり費用がかかるので、利活用のウエイトが少し高くなった形で国の指導が来ると思っており、そういう話も実際に聞いている。それに合わせた形で、桐生もまずその地域自体が生き残るとか、後継者問題とか、それから後継者がいなければ店を貸すので誰でも来てくださいとか、ここら辺を少し手厚くしていくと更に桐生独特の面白い形ができていくと思う。

<板橋委員>

前にやった脱温暖化プロジェクトで、桐生のまちにうちの教員や学生が入っていったが、あれみたいな形で、重伝建地区にある古いものを生かしながら未来的な街にするというような新しい形を、学生が考えるような場も設けてもらって、そこで、自動運転も桐生でやっているのだから、そういうのも使って、快適に人々が暮らせる街はどういうものだろうかという議論をして、それに向かっていろいろ検討していきましょう、みたいなものがあるとすごく良いと思う。

あと例えば、今大学でリカレント教育をやりなさいと言われていている。要は学び直し。仕事に便利なことをもう一度学べるということを大学で社会人を対象にやりなさいということ。我々もリカレント教育の科目を増やしていかなければなら

ない。なので、外から来て住んでくれた人がメリットとして大学の授業を受けられますよと言うと、そこに住む価値が生まれてくるので、勉強しながらやっていると良い施策ができるかも知れない。

<高橋教育長>

リカレント教育には国が補助を出してくれるという話が2～3日前の新聞に掲載していた。桐生が大いに活用すれば、全国的に見ても面白いのではないかと思う。

<板橋委員>

18歳以下の人口が減っているので、現役学生が減っていく中で大学の価値がどこにあるのかということ、リカレント教育になるのではないかと思う。

<亀山市長>

今、板橋先生からあった話は、文化財保護課や空き家対策室にも繋げておくと、幅広い考え方が浮かぶのではないかと思う。

<新居委員>

今年、放課後子供教室を試験的にスタートしていただいたが、スタート時点で募集枠よりも応募が大幅に上回って、反響が大きかった中でのスタートで、それでやってきて、その中でどういうことが今まで行われてきていたのかとか、あとこの先、今一箇所を試行的にやり始めたばかりですが、今後どのように広めていくお考えがあるのかということを知りたい。

<原橋総務課長>

放課後子供教室については、地域の方の参画をいただきながら、学習・スポーツ・文化活動・交流活動などの取り組みを放課後や休業日等（現状は土曜日）に実施している。そのことを通して、子供達の安全安心な活動の拠点づくり、また、本市においては、桐生にまつわる多様な体験をしていただき、教育委員会が目指す「桐生を好きな子どもを育てる」ことに繋げていくための活動を始めている。

今年度については、5月から2月の間、毎月1回土曜日に実施し、中央公民館を拠点に活動しており、年10回を予定している。既に7回実施済みだが、実施内容は、例えば凧揚げ凧作り、伝統芸能の八木節の学習、桐生市の公共施設の消防署などの探検、おりひめバスに乗っての重伝建地区の探検、料理教室、菱町で行われている伝統行事の十日祭への参加など。

市民の協力としては、日頃から各地域で子供たちを見守り育てている生涯学習市民の会や、婦人会、KLCなどの支援をいただいて実施している。

世代を超えて、様々な体験活動や交流活動、あるいは昼食作りや会食を行うことで、子供達の社会性や規範意識、また自主性、そして創造性を育むといったことをもって、地域の教育力の向上や、学校に大きな負担がかかっている現状を是正するようなきっかけづくりということで試行的に始めている。

今年度は、応募総数122名であり、抽選で40名に絞った。今後はこの1年間の取組の成果・課題を検証しながら、徐々に地域に広げていけないかを検討し

ていく。

<新居委員>

両親共働きで家にいない家庭にとって、放課後や休日に安心して子供がいられる場所があるのはすごくありがたい。スタートしたばかりで規模は小さいが、今後を考えたとき、今の事業内容だと、桐生市全体を使うという内容になっている。これを、そのままの内容で人数だけを増やしていくのか、それとも地域ごとに子供が自分の足で友達を誘い合って親の手を借りずに安心して行ける場所にするのか、というところで内容が変わってくると思う。そういったところも含めて先のことを考えていただけたらありがたい。実際、子供の居場所づくり、安心できる場所づくりということであるとしたならば、地区ごとに拠点や子供が行ける場所があるのが、やはり望ましいと思う。

福祉の話にもなるが、子供の貧困問題に関係すると、そういった親御さんが子供に手をかけられない分、地域の人たちがそういった形で子供に関わって、家庭ではできないこと、本来なら家庭でやるべきことではあるが、一緒に何かを作るとか、どこかに出掛けて桐生の自然に親しむとか、という機会を与えられる場もあると思う。

ぜひそういった方向性をもう一度考えていただいて、それに沿った内容を検討していただけたら有難い。

<戸部管理部長>

新居委員の言うとおりの、放課後子供教室は、今現在は中央公民館1箇所だけでやっているが、最終的には目的とすれば、地域ぐるみで子供たちを育てていくというのがあるので、今、社会教育委員会議に放課後子供教室がどうあるべきか諮問している。今年度中に答申していただけることになっているので、先ほどの、地域の拠点がどこになるのか、公民館になるのか学校になるのか、というのを全部含めて協議していただいているところなので、今年度中には方針を出せると思う。

<亀山市長>

この新居委員の話と関連があるようで離れてしまうが、この間、私立保育園の保育士と笑顔のふれあいトークということで話をした。その中で、本来だと家庭でやらなければならないことがやられておらず、要するに親の教育が必要ということだった。今さっきの重点事業の中で、経済的な負担軽減はだいぶしてきたと思うが、今の親御さんはそれが当たり前で育ってきてしまっているところがあって、保育園に預ければ良い、学校に預ければ良い、しつけはうちで教えられないから学校で教えてください、というような親が多いとのことだった。

やはり親の教育というか、親になりきれしていない親をどうするかというのが、保育士の話聞いてすごく現実的な課題だと感じた。子供を預けて全て人に任せているので、アレルギーのことすら家庭で細かく対応できず、全然知識量が違うというような話が多かった。

<高橋教育長>

いじめも含めて、今、放課後クラブも子供教室も全部そうだが、大元は親の教育に行き着くと思う。もう5～6年経つが、「心のきらめき」事業をPTAの人たち中心にやっていて、そこをきっちり手厚くできるようなシステムはできているので、もう少しそこで何とかできると思う。

あとは、入学前の親の方の教育を、福祉なのか教育なのか分からないが、そのところを固めるとある程度把握できる場面が、今半分くらいできているので、そこをもっと拡充すれば良いのではないかと思う。これを始めるには、市が中心になるのも良いが、やはり地域の人材が必要なので、そこをもう一回洗い直して、人材の確保もしていかなければならない。そうすると事業も放課後子供教室も一緒に進められるということになる。一部分は既にできているので、もっと厚くしていけば良い。どこの部局が関係するののかということも、この総合教育会議で議論すべき課題の一つと、話を聞いていて感じた。

<新居委員>

各地区で多くの方が子供たちのために何かしたいという思いを持っている。それらを取りまとめられる人がなかなかいない中で、ぜひ行政には旗振りをして欲しい。こういう旗を立てるから協力してという形で、旗を立てていただきたい。

その旗をめがけて地域の人たちが、こういったことができる、ああいったことができるということで集まって、地域それぞれで色んなことをやるというのも一つ有りかなと思う。ぜひ旗をしっかりと立てていただけたらありがたい。

<亀山市長>

今やっている生涯学習推進委員は、その旗振り役。社会教育委員さんに諮問しているということは、そんな返事が返ってくると思う。ただ、地域に格差がある。すごく人材豊富な地域もあれば、順番待ちをしているような地域もある。

<新居委員>

公民館にしても、時間が空いているという公民館もあれば、サークル活動をたくさんやっていてこれ以上無理という公民館もある。公民館に限らず、色々な空き教室だとか、子供が目指しやすいところが第一条件になると思う。

あとさっき市長が言った、親の教育も同時にやらないと、今日の前にいる子供は日々大きくなっていくので、そこに手を差し伸べながら、親の教育や親の意識を変える何か、例えば講演会などで情報を発信してそれを掴んでもらえるといいなと思うが、なかなかそういう人に限って掴みに来ないのが実状。

<柴崎委員>

親の教育というのは、それぞれの場面でそれぞれの部署が対応するしかないと思う。全体的に親の教育と言っても、人は集まらないし、何を教育していいのかわからなくなってしまう。

さっきの保育士の話は、保育園に関する事で親と話すことはそこでできるし、

小学校は小学校のPTAとしてできるし、中学校もそう。スポーツ少年団体はスポーツ少年団体の親御さんに対する教育ができるし、色々な場面・団体ごとに親の教育はできるので、それぞれがきちんとその場所での役割を果たす必要がある。学校の教育だけではなくて、親の教育も考えてPTA活動等での行事もやっているの、それぞれでやるしかないのではないかと思う。

<高橋教育長>

教育といふとなかなか入り辛いと思う。教育という名前ではなくて、新居委員が言ったように、何かの塊の中に我々だけが教育という意識をしながら、うまく体験や話の場を設けると入っていきやすい。

<大澤委員長>

最近の子供は育ってきた背景が違うので、とても難しいと思う。若くなれば若くなるほどもっと難しくなる。というのは、親がスマホの時代で生きているので、ほとんどスマホをいじっていて会話をしていない。そういう中で親をどうやって変えていったら良いのだろうと日々思っている。

今の市長の話の通り、あの世代の親というのは、おしめを取るしつけとか自分ではなかなかやらない。どちらが良いのか分からないが、それを保育園でみんなやってくれている。親はおしめを取るしつけをやらないことに驚いた。そういう人たちをどうしたらいいのかと思う。

また学校の教員が若返っている。年配の教員が若い教員にいろいろ指導やアドバイスをすると、嫌われるらしい。そういう人たちや先生たちをどうしたらいいのか。それができるのは地元のある程度年配の方々、生涯学習推進委員の方々とか区長さんとか、そういう方がうまくやってくれると違ってくるのかなと思う。

<亀山市長>

確かにこの間の保育士の話では、ベテランの保育士は親に対して言えるが、親より若い保育士さんはなかなか言えないと。

柴崎先生が言ったような、その年代年代というか、その場所場所で如何にコミュニケーションをとってそういう教育をしていくかということになるのでしょうか。

<板橋委員>

うちの奥さんくらいの年齢の人は、子供はもういなくて、時間に余裕があって、今回級生くらいの女性たちでネットワークを作って、子供食堂とかをやろうという話をしている。

地域にはそういう人たちは一定数いると思うので、その人たちを繋げるような役目を行政にしてもらえると、良いものができるのではないかと思う。

<柴崎委員>

地域の人が集まりやすいとなると、公民館が核になるというのが手っ取り早い。ただ、そこに人がいるかどうかという問題で、やはり住民が居たくて、それを取りまとめてコーディネートする人が居なければ、何も話が進まない。そこにそう

いう人を計画的に配置すれば、その人が中心となって色々お手伝いをしてくれる。桐生のまちの状況を考えると公民館が良いが、これもやってくれ、あれもやってくれていうと公民館はパンクして何もできなくなってしまう。今の業務は別として、そういうコーディネーター的な人を一人置いておくだけでも違うと思う。

<亀山市長>

その点、管理部長はどう思うか。

<戸部管理部長>

さっき市長が言ったように、地域で温度差というか、子供会を熱心にやっている地域もあれば、そうでもないような年寄りしか住んでいないようなところもある。そこでは、子供たちに何かしてあげようという感覚が希薄化しているところもあると思う。

柴崎委員が言ったように、公民館は拠点になり得るが、やはり今の小学生中学生を育てている親が公民館に集ってというのがあれば、うまくいくのではないかなと思うが、なかなかできないところもあると感じる。

私がたまたま住んでいるところでは子供会という組織がまだあり、上毛カルタをやったりしているが、そういうところもあれば、全然子供会機能がないところもあるので、全部の地域に広げていくというのは難しいのかなと思う。

<亀山市長>

やれるところからやるしかない。全体が揃わないからといっても、一つの拠点だけでやれることは広げていって良いと思う。

<戸部管理部長>

今、中央公民館で試行的にやっているが、地域に広げるときも試行的にどうか、ここからやってみようというのは、やっていかなければならないと考えている。

<亀山市長>

大澤先生の言ったように、本当に今東京なんかに行くと、電車の中でもどこでも全員スマホをいじっている。手ぶらでいる方が珍しい。どういう世の中になったのだろうと思う。

<新居委員>

青少年課がやっている情報モラル講習会などがより重要になっていて、幼稚園の保護者からそういった情報モラル講習会を組んでいこうかという話が出たということを経験が言っていた。

親はスマートフォンなどの情報端末を当たり前のように使っているが、どれだけの危険性があるのかということは、使っている本人も希薄である場合も有るので、そういったところからスタートしていただければ、それを聞いて保護者の方は、こんなに危険なのだということに気付く場面もあると思います。

<亀山市長>

何のために子供に携帯を持たせるのか。親との連絡だけとか、色々なことがあ

りますが、親は子供たちとではなく自分の友達と仲良くやっているだけに思える。だから、子供が欲しいって言うのと与えてしまうのではないかと思う。便利なことは確かだが。

他に何かございますか。

<柴崎委員>

先日、広報きりゅうの11月号に3ページくらいに亘って桐生の特色ある教育の特集が出ていて、それが非常に良いと思った。桐生は良い取組をたくさんやっているが、市民の方は知らないというか、知る機会が少ないと思う。桐生タイムスはその都度情報を出してくれているが、色んな場面で見たり聞いたりする機会があると、桐生の取組を理解して、桐生で良い子供たちを育てられるということが分かって非常に安心もするし、希望も持てると思う。

先日、少年の主張での発表を聞いて、区長会長が桐生は良い子が多いという話をしていたが、それも聞かなければ分からない。実際に知れば、桐生のすごさや桐生の教育の良さが伝わるし、安心して桐生に暮らせるということになるので、そういう広報活動をもっとやってもらいたい。欲を言えば、市の広報に毎回1～2ページは教育に関する記事や写真を載せるとか、あるいは学校ごとの特色ある活動を広報に載せていくとか、小中学校に限らず、幼・小・中・高・大まで含めて、あるいは連携まで含めて、そういうことを毎回特集ではなく連載という形を取れば、もっと市民にも色んなことを理解していただけたらと思う。

この間テレビで見たが、小学校で今試行的に行っている英語とこれから始まる道徳、特に英語が非常に心配で、どの程度のことを学校でやってくれるのか、あるいは塾でも学ぶ必要があるのか迷っている親がたくさんいるという話を見た。そういう教育に関して、子育て世代は非常に迷い、悩み、困っている。そういうのを広報として取り上げると、もっと市民に安心していただけたらと思う。

<亀山市長>

広報担当部長の総合政策部長がいるので、良い質問。

<和佐田総合政策部長>

教育に限らず、桐生市の取組を市内外の人にPRしていくことと、プラス市内の人には郷土への誇りを持っていただくことと、まちの価値を高めるようなキーワードであるとか、何を売り込むかということが大事で、その中身について今準備会を立ち上げて協議している。その中でも、柴崎委員が指摘した特色のある教育というのも桐生のPRポイントだと思うので、市外の方だけではなく市内の方にもPRしていきたい。

また、広報には、教育の特色を掲載している。連載についても、最後の方のページで年間のテーマを決めてやっている。教育のことも良い話だと思うので、積極的に検討していく。

<柴崎委員>

学校教育課あるいは教育委員会事務局も忙しく、そんな時間は無いと怒られる

かも知れないが、それくらいの余力はあるのではないかと思うので、相談をしていただきたい。

<亀山市長>

広報でも色々一生懸命考えて、桐生の良いところや歴史を連載で紹介して、興味を持つようにカラー印刷にして紙面の量も増やしている。

今取り組んでいるシティブランディングでも、一生懸命桐生の宣伝を考えている。

<和佐田総合政策部長>

まずどうやって発信するかよりも、中身。何をポイントにしてPRするかということは今、月1回外部委員さんとも協議している。

<板橋委員>

教育は移住したい人にとっては、良いPRポイント。

若い人間が都会を選ぶ理由の一つが、地方に居ると質の高い教育が受けられなくて良い大学に入れないということで、都会へ引っ越す人がいる。しかし、そうではなく、桐生は特別だと。桐生に住めばどこの大学でも受かるというのをうまくPRできると、桐生に行ってみるかという気になるかも知れない。

<亀山市長>

今柴崎委員が言ったように、広報は市内に住んでいる人しか見ないし、若い人は特に見ていない。表紙を見るくらいで、中身は読まない。

ただ、市役所のホームページも、外の人にはなかなかホームページも開かない。フェイスブックの方が拡散力がある。板橋委員が言ったように、これも一つの移住だとかの問題になる。

厚生病院で医師を確保するときにも、桐生に赴任するのが嫌だという理由で集まりにくい。前橋に居れば高度な教育が受けられると、誤解している。だから我々がもっと積極的に「桐生に来れば安心」というのを見せると、安心してお医者さんも家族で桐生に来てくれるのではないか。

<新居委員>

桐生は子育てをするには良いところだと思うのだが。

<亀山市長>

子供たちの方が割と桐生の良さを理解してくれている。しかし、どうしても親がこんな桐生じゃって言いすぎるところが勝ってしまっている。

桐生市民に現状をどうやって知らせるかだと思う。比べれば桐生の方が勝っているのに、太田の方が良く見えたり、前橋の方が良く見えてしまっている。

やはり移住してもらおうとか、若い人たちが桐生に家を持つ時、一番の問題なのは働く場よりも教育の場だとよく言われるので、そこをしっかりとっていかないと、将来的に問題になってくると思う。

教育をこうやって考えると、幅が広い。何でも教育になってくる。

<柴崎委員>

何でも教育になるから、何でも教育委員会というわけにもいかない。まち全体で教育を支えてもらう必要がある。

<亀山市長>

こども園の話もそう。一般の人は分からない。保育士さんたちも不安になっている。これも一回特集を組んだほうが良いのではないか。こんな風に幼児教育は変わっていくとか、保育園と幼稚園が変わってこうなるという特集を。

○閉会

<田島企画課長>

(終了：午後4時17分)